

国際日本学研究所

I 2020年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2020年度大学評価結果総評】（参考）

国際日本学研究所においては、活発な研究活動が行われている。公開研究会、国際フォーラム、研究会を複数回開催し、出版物、学会発表等の研究成果についても、量・質ともに十分評価できる。研究成果に対する社会的評価もあり、科研費等外部資金の応募・獲得状況もめざましい。但し、江戸東京研究センターと研究や成果が重複していることから、それぞれの組織の位置づけの検討が望まれる。

海外の人材発掘を積極的に行い、国際日本学研究所を支援する努力も評価できる。今後は、研究者の人材発掘と並行して、国際的な共同研究実施に向けた検討や、年度目標・達成指標の明確化にも期待したい。

【2020年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

連携組織である江戸東京研究センターとの差異化を検討し、研究所独自の研究企画を行うべく努力中である。国際的な共同研究事業として第3回アルザス・日欧ワークショップ「越境する日本語・日本文化」を、国際日本研究コンソーシアム、アルザス・欧州日本学研究所と連携してオンラインで行うことができた。公開研究会「故郷にとっての移民」もオンラインで開催した。コロナ禍のため自由な研究活動はできなかったものの、オンラインの利点も考慮しながら、さらに国際的な共同研究を推進する。

【2020年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

国際日本学研究所では、国際共同研究の実施を推進し、研究者の人材発掘をするようにとの指摘に対し、第3回アルザス・日欧ワークショップ「越境する日本語・日本文化」を、国際日本研究コンソーシアム、アルザス・欧州日本学研究所の活発な研究者間の交流のもとに実施し、また公開研究会もオンラインで活発に開催している。大規模な国際ワークショップを実施したことによって、年度目標・達成指標を明確化する課題も、また国際共同研究を拡充する課題に積極的に取り組んだことを高く評価できる。

江戸東京センターと連携しながら、こうした独自の企画を重ねることで改善されている。すでに行われているその他学内への開放がより進むとともに、学外では検討中のアジア・アメリカの研究者との連携も進展することが期待される。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2021年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 研究所（センター）の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2020年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2020年度に研究所（センター）として実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を記入。

1 研究会「日本の『グローバルな60年代』とコスモポリタン・パブリクス」

プログラム：10：00～11：00 高田圭講師による研究報告

11：00～12：00 質疑応答及び今後の研究会開催方針について意見交換

主催：国際日本学研究所

開催日：2020年10月9日（金）10：00～12：00 Zoomによるオンライン実施

参加者：13名（開催案内は運営委員のみへ通知）

報告者：高田 圭（国際日本学研究所）

司会：横山 泰子（国際日本学研究所長／理工学部）

2 アルザスワークショップ「越境する日本語・日本文化—言語文化の多様性をもとめて—」

内容：フランス・アルザス欧州日本学研究所と継続的な共同研究事業：ヨーロッパの研究者との

国際シンポジウムをアルザスにて開催。近年は個性的な日本研究を展開しているヨーロッパの若手研究者から、研究内容及び研究環境についても語ってもらうワークショップを開催。

主催：法政大学国際日本学研究所，アルザス欧州日本学研究所，「国際日本研究」コンソーシアム

開催日：2020年11月6日(金)～8日(日) 各日17時00分～21時30分(日本時間)

Zoomによるオンライン実施

参加者：2020年11月6日：52名，11月7日：43名，11月8日：58名

基調講演：坪井秀人(国際日本文化研究センター)，鈴木裕輔(名城大学)

報告者：石黒秀昌(フランス国立東洋言語文化学院)，ガッド・ハイ・ゲルショニ(名古屋大学)，

ルイーゼ・ラウス(東京芸術大学)，篠崎久里子(ストラスブール大学)，

葉暁瑤(総合研究大学院大学)，尹芷汐(大阪大学)，

シルケ・ハスパー(ハイデルベルク大学)，房叡娥(大阪大学)，

フェリッペ・アウグスト・ソラレス・モッタ(大阪大学)，

アレクサンドラ・ローランド(デュースブルグ・エッセン大学)

コメンテーター：安孫子信(法政大学)，黒田昭信(ストラスブール大学)，

ジョゼフ・キブルツ(フランス国立科学研究センター)，

レギーネ・マチアス(アルザス欧州日本学研究所)，

小口雅史(法政大学)，エーリヒ・パウエル(アルザス欧州日本学研究所)，

サンドラ・シャール(ストラスブール大学)，高橋 希実(ストラスブール大学)，

高田圭(法政大学)

3 シンポジウム「漢陽と江戸東京それぞれの暮らし」

内容：朝鮮後期の歳時記『京都雑志』をもとにまとめられた『朝鮮の雑誌』の中から，都市の公共的な空間の利用，また双方の都市の特徴的な文化にかかわる4節を翻訳し，その内容をふまえて江戸東京の同種の事象との比較研究を行った。

主催：国際日本学研究所，江戸東京研究センター

開催日：2021年2月20日(土)13:00～18:00 Zoomによるオンライン実施

参加者：100名

報告者等：土田牧子(共立女子大学)，金美眞(韓国国立芸術総合学校)，市川寛明(江戸東京博物館)，鄭敬珍(檀国大学校)，染谷智幸(茨城キリスト教大学)，山田恭子(近畿大学)，金谷匡高(法政大学)，横山泰子(法政大学)，高村雅彦(法政大学)，田中優子(法政大学)，小林ふみ子(法政大学)

司会：小林ふみ子

4 研究会「新しい「国際日本学」を目指して(9)／故郷にとっての移民—占領期の広島と在米広島県人の貿易業者」

内容：2018年度より「新しい「国際日本学」を目指して」を9回開催。「国際日本学」が認知されるようになった今，研究対象の時代・地域・分野を広げる段階として，歴史学系・哲学系・思想史系さらに文学系にまでわたる複合的な分野を扱う研究会を2018年度から2019年度にかけて開催。2020年度以降は，経済学・政治学・社会学・人類学を主な対象とするSocial ScienceInternational Japanese Studies(SSIJS:国際日本学における社会科学)の観点からの研究に注力する。

今回は，広島における平和運動・被爆者運動など原爆被害からの復興の過程において

日系アメリカ人との交流がいかなる意味を持っていたのかを検討し，被爆都市としての広島の歴史と明治時代以来の出移民の歴史とを接合した。

主催：国際日本学研究所

開催日：2021年2月24日(水)14:00～16:00 Zoomによるオンライン実施

参加者：23名

報告者：川口悠子(法政大学理工学部)

司会：横山泰子(国際日本学研究所長／理工学部)

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

https://hi.jas.hosei.ac.jp/page_symposium/2020eventreport

②対外的に発表した研究成果(出版物、学会発表等)

※2020年度に研究所（センター）として刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を記入。

1. 出版物等

(1) 研究成果報告集『国際日本学』第18号（2021/2/26 編集・発行：国際日本学研究所）

a 研究成果報告

(a) 『グローバル地域研究としての国際日本学—日本を超えて、日本をとらえる、思考と手法—』（高田圭／本研究所専任所員）

(b) 『編集後記「編集室より」から検討する『香港東洋経済新報』の特徴』

（鈴木裕輔／本研究所客員所員）

(c) 『『諏方大明神画詞』の「唐子」をめぐる試論』（中村和之／本研究所客員所員）

b 「国際日本学研究所 2019年度若手研究者研究論文」採択論文

『藤原貞敏が唐からもたらした琵琶演奏伝承とその背景』（根本千聡／本学人文科学研究科日本文学専攻国際日本学インスティテュート博士後期課程）

c 研究ノート

『日本美術商ティコティンと、海を渡った表具師・原順造—戦前オランダ・ハーグにおける活動記録—』（堀咲子／シュトゥットガルト大学言語センター講師）

d 書評

『鄭敬珍著『交又する文人世界—朝鮮通信使と兼葭雅集図にみる東アジア近世』（染谷智幸／茨城キリスト教大学教授／2021年度より本研究所客員所員）

(2) 『1968-A Global Approach The Japanese Global Sixties in Isolation: Towards a Global Historical Sociology of the Sixties 137-155 Europejskie Centrum Solidarności』（2020/12/01, 978-83-66532-06-9, 高田圭）

(3) 『現代フランス哲学入門』川口茂雄、越門勝彦、三宅岳史、他 p82-p84（ミネルヴァ書房, 2020/07/20, 978-4-623-08498-2, 安孫子信）

(3) 『好古趣味の歴史 江戸東京からたどる』小林ふみ子・中丸宣明編、ほか神田正行・出口智之・大塚美保・真島望・佐藤 悟・金 美眞・有澤知世・阿美古理恵・稲葉有祐・多田蔵人・合山林太郎・関口雄士執筆 古き江戸をいかにたずねたか—はじめに、chapter1 江戸の歴史のたどり方、column 風俗を記録する意図—雑芸能者たちの〈江戸〉、江戸を知る文献 22点 pp. 6-10, 13-29, 131-135, 258-268（文学通信, 2020/06/15, 小林ふみ子）

(4) 『軍記物語講座第2巻『無常の鐘声 平家物語』松尾葦江、佐伯真一、久保勇、平藤幸、高木浩明、櫻井陽子、原田敦史、牧野淳司、谷知子、源健一郎、浜畑圭吾、鈴木孝庸、山中玲子、出口久徳、伊藤悦子 修羅能以前の「平家の能」—〈経盛〉の再検討を通して— 213-229（花鳥社, 2020/07/30, 978-4-909832-22-1, 山中玲子）

2. 論文

(1) 「グローバル地域研究としての国際日本学—日本を超えて、日本をとらえる、思考と手法—」（高田圭, 『国際日本学』18, 3-36, 2021/02/26）

(2) 「Connecting with the First or the Third World? Two Paths Toward the Cross-National Movement Mobilization in the Japanese Global Sixties Moving the Social: Journal of Social History and the History of Social Movements Klartext publishers」63, 65-90（2020/06, 高田圭）

(3) 「東アジアの地図を読む—19世紀大坂商人の東アジア」小林ふみ子 「東アジア文化講座3 東アジアに共有される文学圏」（文学通信, 367-371, 2021/03/12, 学術叢書のうちのコラム, 小林ふみ子）

(4) 「畝の狂歌の評価軸」（近世文藝, 113, 1-15, 2021/01, 小林ふみ子）

(5) 「四方赤良こと大田南畝判『狂歌角力草』稿本解題・翻刻」小林 ふみ子（法政大学文学部紀要 法政大学文学部, 81, 21-37, 2020/09, 0441-2486, 小林ふみ子）

(6) 『墨水四時雑詠』注解第三回 停雲会（今回担当：杉下元明・日原傳・小林ふみ子・堀口育男・佐藤温）太平余興（太平書屋, 6, 19-35, 2020/04, 小林ふみ子）

(7) 「戦前期東京都における史蹟の分布とその特徴 - 『東京都史蹟名勝天然記念物旧市域内』（1943）の分析 - 」米家志乃布（『法政大学地理学会 70周年記念論文集』, 2021/03, 米家志乃布）

(8) 「蝦夷地像の変遷と蝦夷図」米家志乃布 小野寺淳・平井松午編『国絵図読解事典』（創元社, 132-136, 2021/02/20, 米家志乃布）

(9) 「The Cartographic Heritage of Tokyo: The Representation of Urban Landscapes on Maps from the Seventeenth to Nineteenth Centuries」 Shinobu Komeie Journal of Research and Didactics in Geography (Italian Association of Geography Teachers) 2, 115-125 (2020/12/09, 米家志乃布)

(10) 「北前船・商人・港/函館港の現在と過去」 米家志乃布 地図中心 (日本地図センター, 571, 3-4, 11-13, 2020/04/10, 米家志乃布)

(11) 「三木清のバスカル論における宗教性／非宗教性の画定」 西塚俊太 (法政大学文学部紀要, 法政大学文学部, 第82, 49-64, 2021/03/31, 西塚俊太)

3. 学会発表等

(1) 口頭発表 (一般) Toward a Global Historical Sociology of Social Movements IV ISA Forum of Sociology 2021/02/23 (高田圭)

4. その他

特になし

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・本学学術研究データベース

③研究成果に対する社会的評価 (書評・論文等)

※研究所 (センター) がこれまでに発行した刊行物に対して 2020 年度に書かれた書評 (刊行物名、件数等) や 2020 年度に引用された論文 (論文タイトル、件数等)、2020 年度の web サイトアクセス件数、掲載コンテンツダウンロード件数、表彰・受賞歴等の詳細を記入。

書評

(1) 岩田秀行著『江戸芸文攷 : 黄表紙・浮世絵・江戸俳諧』 小林 ふみ子 国語と国文学 97/ 11, 141-145 2020/11 0387-3110 (小林ふみ子)

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・本学学術研究データベース

④研究所 (センター) に対する外部からの組織評価 (第三者評価等)

※2020 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

行っていない。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・

⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況

※2020 年度中に研究所 (センター) として応募した科研費等外部資金 (外部資金の名称、件数等) 及び 2020 年度中に採択を受けた科研費等外部資金 (外部資金の名称、件数、金額等) を記入。

1. 2020 年度中に応募した外部資金 7 件 (全て科研費)

(1) 研究代表者 2 件

- ・米家志乃布 基盤研究(C) 近代東京における名所・史蹟の空間構造に関する歴史地理学的研究
- ・山中玲子 基盤研究(A) 能の「ことば」の包括的・領域横断的研究に向けたオンライン・リソース構築

(2) 研究分担者 5 件

- ・横山泰子 挑戦的研究 異文化理解の理論構築のための怪異・妖怪画像資料の国際比較研究
- ・松本剣志郎 基盤研究(B) 狩野亨吉収集文書の基礎的研究: 近世社会の分析と研究ネットワークの構築
- ・西塚俊太 学術変革領域研究 (A) 自立と共生をつなぐ理論的基礎の創出に関する研究
- ・竹内晶子 基盤研究(A) 能の「ことば」の包括的・領域横断的研究に向けたオンライン・リソース構築

・宮本圭造 基盤研究(A) 能の「ことば」の包括的・領域横断的研究に向けたオンライン・リソース構築

2. 2020年度中に採択を受けた外部資金 23件 (全て科研費)

(1) 研究代表者 12件

・高田圭 国際共同研究加速基金(帰国発展研究) 日本のコスモポリタンな60年代運動における第三世界とのつながりとその意義 2018年度採択(研究期間2020-4-1~2023-3-31※) 4,100,000円(18K19957) ※研究期間: 交付申請年度から起算して3年目の年度末まで。交付申請は、日本国内の研究機関に所属し、科研費の応募資格を取得後、可能。(学振「公募要領」より)

・安孫子信 基盤研究(C) オーギュスト・コント『実証哲学講義』の歴史的意義をめぐる学際的研究 2019-04-01~2022-03-31 820,000円(19K00116)

・小口雅史 基盤研究(B) 古代末期防御的集落の実態解明と、中世移行期日本北方世界を含む北東アジア史の再構築 2019-04-01~2023-03-31 2,500,000円(19H01297)

・小林ふみ子 基盤研究(C) 江戸狂歌資料による大衆的作者=読者の教養の研究 2020-04-01~2025-03-31 500,000円(20K00298)

・米家志乃布 基盤研究(C) 民間地図作製史からみたフロンティア像の日露比較研究 2017-04-01~2021-03-31 600,000円※(17K03257) ※参考: 2020年度直接経費

・大塚紀弘 基盤研究(C) 資料調査に基づく日本中世における渡来人の基礎的研究 2019-04-01~2024-03-31 600,000円(19K01001)

・松本剣志郎 基盤研究(C) 近世都市インフラ維持管理の社会史的研究 2018-04-01~2021-03-31 500,000円※(18K04545) ※参考: 2020年度直接経費

・宮本圭造 基盤研究(B) 近世大名家道具帳の網羅的収集とデータベース化を通じた古典籍伝来の文化史的研究 2020-04-01~2025-03-31 2,000千円※(20H01234) ※参考: KAKENサイト掲載 2020年度直接経費

・菱田雅晴 基盤研究(A) 現代中国における腐敗パラドックスに関するシステム/制度論的アプローチ 2017-04-01~2022-03-31 1,200,000円(17H01638)

・山本真鳥 基盤研究(C) オセアニア植民地時代における非白人移住者の歴史人類学的研究 2019-04-01~2023-03-31 1,000,000円(19K01208)

・大澤ふよう 基盤研究(C) フリーライダーと二次的语法化: 構造変化としての语法化理論の構築に向けて 2018-04-01~2021-03-31(18K00665)

・鈴木多聞 基盤研究(C) 占領下の宮中グループの戦争観と平和観 2019-04-01~2024-03-31 800,000円(19K00993)

(2) 研究分担者 11件

・菱田雅晴 基盤研究(A) 現代中国の政治エリートに関する総合研究: 選抜と競争の在り方、ガバナンス能力 2018-04-01~2022-03-31 400,000円(18H03626)

・安孫子信 基盤研究(B) バルクソン『時間と自由』の総合的研究—国際協働を型とする西洋哲学研究の深化 2019-04-01~2022-03-31 180,000円(19H01190)

・小口雅史 基盤研究(B) 中世の書簡体文書による統治実践と秩序形成をめぐる日欧比較研究 2017-04-01~2021-03-31 490,000円※(17H02377) ※参考: 2020年度直接経費

・小口雅史 基盤研究(A) 平城宮・京跡出土木簡とその歴史環境のグローバル資源化 2018-04-01~2022-03-31 150,000円※(18H03597) ※参考: 2020年度直接経費

・小口雅史 基盤研究(B) 料紙分析の手法による中国古文書学の基盤構築とその応用 2020-04-01 - 2024-03-31 500,000円(20H01298)

・小林ふみ子 基盤研究(C) 高大連携による古典文学の探究型授業の教材作成と教育モデル構築の実践 2019-04-01~2024-03-31 40,000円(19K00530)

・赤石美奈 基盤研究(C) 音楽的分析のための能楽の謡の多層的なモデル化 2020-04-01~2023-03-31 20,000円(20K00136)

・山中玲子 基盤研究(A) 伝統芸能音楽の技をヒューマンロボットインタラクション技術へ適応させるデザイン研究 2016-04-01~2021-03-31 100,000円※(16H01804) ※参考: 2020年度直接経費

・山中玲子 基盤研究(C) 音楽的分析のための能楽の謡の多層的なモデル化 2020-04-01~2023-03-31 80,000円(20K00136)

・山中玲子 基盤研究(C) 古代・中世日本における廃墟の文化史 2020-04-01~2023-03-31 120,000円

(20K00337)

・菱田雅晴 基盤研究(A) 現代中国の政治エリートに関する総合研究: 選抜と競争の在り方、ガバナンス能力 2018-04-01~2022-03-31 400,000 円※ (18H03626) ※参考: 2020 年度直接経費

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・研究開発センター市ヶ谷事務課作成資料
- ・科学研究費データベース「KAKEN」

⑥研究所(センター)における研究活動等に関して、COVID-19 への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。

※取り組みの概要を記入。

研究会等はオンラインで行い、参加者が多数の場合でも密にならないよう配慮をしている。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
・上記した多くの研究業績は、各所員の多様な業績の中から国際日本学構築に貢献するものを中心に選んでいる。ここに氏名があげられていない他の所員の研究業績ならびに、所員が兼務する江戸東京研究センターでの研究実績をも含めると、本研究所での相対的な研究レベルは特記できると考えている。	

(3) 問題点・課題

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画(既に実施している場合にはその進捗状況も含めて)をあわせて記入してください。「問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
・海外に於ける日本研究の衰退傾向は相変わらず大問題であるが、本研究所が国際日本研究コンソーシアムに加わり、他の組織と連携したことで、様々な対策を講じることができると考えている。新任の専任所員を中心に若手研究者の交流は着実にすすめられており、今後が期待される。	

【この基準の大学評価】

国際日本学研究所における研究活動に関しては、公開研究会、3日わたる国際ワークショップ、公開シンポジウム、シリーズ研究会がいずれもオンラインで開かれた。COVID-19 下において、積極的にオンライン研究会を行い、参加者も多く、質・量ともに十分で、評価できる。ストラスブール大学との研究交流をはじめ、国際共同研究が一層進んでいる点が大いに評価できる。研究成果についても、昨年度より書籍や学界発表の件数は減ったものの、論文11点、研究所の研究成果報告集の刊行、精力的な研究活動がつついており、十分評価できる。他方、昨年度同様、外部からの組織評価は得られていない。科研費等外部資金については、2020 年度中に応募したものが7件、年度中に採択したものが、研究代表者12件、研究分担者11件と多数にわたり、評価できる。COVID-19 への対策は、研究会をオンライン化したことが中心で、3日間にわたる国際シンポジウム、シリーズ研究会、個別研究会など様々な形態のプログラムをオンライン化でこなしていることが評価できる。学内では日本学インスティテュートとの連携により、研究活動の幅を広げるとともに、教育への還元が組織として進められたことは評価できる。

III 2020 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	「国際日本学」という研究分野の存在が広く認知されてきたことを受けて、試行錯誤を経

		ながら、その対象分野を拡大充実させていくことを目指す。その際に、国際日本学研究所と深く関わる、国内外の他の機関との連携をも模索する。	
	年度目標	これまで研究対象として扱ってこなかった地域と日本との関係の調査研究をすすめるとともに、社会科学的な視点も加味した新たな研究分野を開拓することを目標とする。	
	達成指標	研究対象および連携研究者の増加	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
		自己評価	S
		理由	国際日本文化研究センターとアルザス欧州日本学研究所との連携による若手研究者の発表を連ねた研究会合、日韓の研究者による国際シンポジウム（「江戸と漢陽」）、さらに日米関係を扱った研究会をいずれもオンラインで開催した。研究対象を広げることができ、連携研究者も増やすことができた。
		改善策	オンライン開催にすることにより、かえって研究対象や連携研究者の増加が見込まれることがわかった。今後も、研究内容によって、オンライン上での企画が開催できるようにする。
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
2	中期目標	社会貢献・社会連携を進めるために、研究会の一般への公開を進め、また成果とりまとめの後は、電子化を通じて簡便な方法で広く公開することを目指す。また本務に影響の出ない範囲で、マスコミや研究者からの所蔵史資料原本の閲覧希望に応じるようにする。社会連携・社会貢献を進めるために、電子化などを通じて研究成果を広く簡便に公開できるようにするとともに、本務に影響の出ない範囲で、刊行物・所蔵史資料の閲覧を可能にする。	
	年度目標	本研究所自設 HP の充実をはかるとともに、オープン予定の HOSEI ミュージアムに協力し、よりわかりやすい形で情報発信を行う。	
	達成指標	研究会への一般市民の参加者の増加。電子的に公開された刊行物の増加。データベースの搭載数の拡大。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
自己評価		S	
理由		本研究所の HP をよりよく活用しやすくなるよう、HP の改修事業を行った。研究会等もオンラインで開催し、成果を HP で公開した。HOSEI ミュージアム館長には本研究所員が就任し、他の所員もオープン後も引き続き尽力している。	
改善策		電子的に公開された刊行物をさらに増やし、データベース搭載数も拡大する。	
<p>【重点目標】 これまで研究対象として扱ってこなかった地域と日本との関係の調査研究ならびに社会科学的な視点も加味した新たな研究分野を開拓することを目標とする。</p> <p>【目標を達成するための施策等】 新たな人材を研究所に迎え、研究活動を促進する。アルザス欧州日本学研究所を拠点に海外での人材をさらに発掘し、国内の研究機関とも組んで協力関係を深める。</p> <p>【年度目標達成状況総括】 新任所員を中心に国際日本文化研究センターとの協力で開催したアルザス欧州日本学研究所とのオンラインシンポジウムを実施し業績を上げた。重点目標は達成することができた。</p>			

【2020 年度目標の達成状況に関する大学評価】

国際日本学研究所における 2020 年度の年度目標は、これまで研究対象として扱ってこなかった地域と日本との関係の調査研究をすすめるという点では、アルザス欧州日本学研究所との密接な連携による研究交流、日韓の研究者による国際シンポジウム（「江戸と漢陽」）によって、海外の人材発掘と若手研究者の交流促進とあわせて、非常に大きな成果を挙げている。さらに社会科学的な視点も加味した新たな研究分野を開拓する目標も、日米関係を扱った研究会などで達成できている。新たな国際日本学の構築にむけて人材ネットワーク、研究分野の拡大とともに進んだことが確認できる。

IV 2021年度中期目標・年度目標

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	「国際日本学」という研究分野の存在が広く認知されてきたことを受けて、試行錯誤を経ながら、その対象分野を拡大充実させていくことを目指す。その際に、国際日本学研究と深く関わる、国内外の他の機関との連携をも模索する。
	年度目標	従来の「国際日本学」研究をさらに推進するとともに、新しい方法による研究、新しい研究分野の開拓を目指す。
	達成指標	研究対象および連携研究者の増加
No	評価基準	社会連携・社会貢献
2	中期目標	社会貢献・社会連携を進めるために、研究会の一般への公開を進め、また成果とりまとめ後は、電子化を通じて簡便な方法で広く公開することを目指す。また本務に影響の出ない範囲で、マスコミや研究者からの所蔵史資料原本の閲覧希望に応じるようにする。社会連携・社会貢献を進めるために、電子化などを通じて研究成果を広く簡便に公開できるようにするとともに、本務に影響の出ない範囲で、刊行物・所蔵史資料の閲覧を可能にする。
	年度目標	本研究所自設 HP の英語ページの改修などを行い、より効果的な情報発信を目指す。研究会企画をオンラインでも開催し、コロナ禍においても多くの市民参加を可能とする。
	達成指標	研究会への一般市民の参加者の増加。公開された刊行物の増加。現状のウェブサイトの再検討と改善

【重点目標】

従来の「国際日本学」研究をさらに推進するとともに、新しい方法による研究、新しい研究分野の開拓を目指す。

【目標を達成するための施策等】

対面に加え、オンライン研究会やシンポジウムを開催することにより、これまで招聘しにくかった研究者を積極的に招聘する。

【2021年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

国際日本学研究所における中期目標、年度目標ともに、国際日本学研究を推進するための新しい方法論と研究分野を開拓することが挙げられている。昨年度の目標と重なるが、方法や分野の新規性を強調する姿勢がみられる。同時に、ホームページの英語版の改訂をはじめ、ウェブサイトでの広報の充実と、研究会のオンライン開催によって公開性を高めることも挙げられている。国際共同研究交流を積極的にに行い、オンラインによって新たな研究者との連携が図れたことにより、新しい共同研究の方法や分野が開拓できていることは評価できる。ただ、研究所の推進している研究分野や方法論の新しさが具体的に触れられていないため、重点強化する研究分野や方法が明示されていくことが望ましい。

【大学評価総評】

国際日本学研究所においては、COVID-19 下において一層活発な研究活動が行われている。国際ワークショップ、公開研究会、研究会を多数開催し、ネットワーク・人材発掘、方法論・分野拡充の双方で研究を深化させた点が高く評価される。国際的な共同研究が飛躍的に進捗しており、今後のさらなる発展を期待できる。それと同時に、重点強化する研究分野や方法が明示されていくことが望ましい。

前年度に引き続き、科研費等外部資金の応募・獲得状況も良好で、出版物、学会発表等の研究成果についても、量・質ともに充実しており、研究成果に対する社会的評価が高い。オンライン研究会の告知やホームページの英語版の改訂などウェブサイトでの広報を充実することで公開性を高める取り組みが遂行されており、海外からの研究会への参加につながるというような成果も現れている。研究所の性格からも、それを踏まえて、今後公開性の向上が一層期待できる。

江戸東京研究センターとの研究や成果が重複 についても、こうした活動によって組織間の峻別が一定程度ははかられていることから、今後それぞれの組織の位置づけの明示化が望まれる。